

---

# あのこと、わたし。

けふこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あのこと、わたし。

### 【Nコード】

N2225J

### 【作者名】

けふこ

### 【あらすじ】

愛しい彼女のお話を、してあげる。もう二度と忘れないように、ここに閉じ込めて、忘れるの。

**（前書き）**

一年間の振り返りと共に。

愛しい彼女に、どうか、幸せを。

彼女の話をしてあげよう。

彼女と一緒に歩いたあの道を、今一度話してあげるから。

親しい人がいなくて、安心した。

クラス分けを見ながら思う。

もう今年は受験なんだから、みんなとぬくぬくはしてられない。

そして、卒業式も間近で、その時は、泣いては、いけないから。

泣いてしまったら、私がまるでみんなのことを好きみたいに見えてしまう。

私が、みんなと一緒にいられて、良かったと思っているように、見えてしまう。

そんなのはとてもじゃないが嫌だ。

私は心なしか足取りを軽くしながら、これからのこのクラスでの暮らしをどうしようか考えて、教室へ向かった。

修学旅行は、インフルエンザの影響で延期になった。  
とてつもなく残念だった。

京都と奈良。神社とか、お寺が大好きなんだ。

鳥居の朱色を見るとときどきする。大きな鐘を見ると、心が躍る。  
私は、観光をしに行くんだ。

（友達とは、一緒に行きたくないな。）

くすくす笑う。

なんて、酷い子だろう。

夏休みは、東京に行った。

弓道の県大会で優勝して、全国大会に出場した。だけど。

その頃、私はやけに予知夢を見ていて、県大会で優勝することが分かっていた。だから、あまり感動的ではなかった。それに、全国大会も、予選通過できないことは分かっていた。

意味もなく東京に行つて、悔しい思いも無くて、ただ虚しくて、それだけだった。

もともと、私は弓道が好きじゃなかったし。夢で知っていなくても、きつとこんな想いだつたのだろう。

ただ、ただ弓道をしていた。

一年生の時の私は、運動部に入るような根気もないし、文化部の吹奏楽部も美術部にも行く気はなかった。姉が弓道部だったから、母や周りの人に、

「お姉ちゃんみたいに弓道で活躍したいな」

なんて無邪気に言つて、弓道部に入った。

とりあえず、部活に入ることが出来ればよかったんだ。

そんな気持ちで、私は弓道部にいた。そうして、ただ弓道をやっていた。

そうしたら、県大会で優勝しただけだった。

弓道部の人たちには少なからず悪いとは思っていたのに。なのに、謝る言葉が浮かんでこなかった。

自分が酷い子だとは、分かっている。  
ある子に言われたから。

それから自覚した。

ある子、私の大好きな女の子。ずっと一緒に、姉妹みたいに一緒にいた子だ。

その子に、あなたは酷い子と言われたんだ。

彼女が言った言葉は、私はいつでもそうだねって言った。

だから、その時もそうだねって言った。

彼女はずっと大切。彼女は、私の全て。

彼女の言うことは全て本当だ。

だから私は、酷い子。

いつの間にか体育祭も文化発表会も終わっていた。今思い返しても、なんの記憶も無い。

ただ、とても大切な思い出があるから。

興味の無い人たちのお祭りごとなんて、すぐにかき消されてしまう。

その大切な思い出は、彼女とのお別れだ。

彼女は、私に優しくそんな微笑を浮かべて冷たく言った。

「わたし、あなたとは一緒にいられないな」

私は、その言葉がよく分からなかった。

彼女の言葉はいつだって単純明快で、頭の足りない、感情の足りない私にだって一言で分かるのに。

今回は、よく分からなかった。

言葉の意味が良く分からない。もう少し、分かりやすく言ってよ。

「くすくす。わたし、あなたのことが一番好き。世界で一番大好きよ、愛している」

？

私は首をかしげた。

私も同感。私、あなたのことが一番好き。世界で一番だいすきだよ、あいしている。

「嬉しい。けど、哀しい。わたし、もうあなたと一緒にいてはいけないの。あなたを愛しているから」

彼女は、泣いているような、笑っているような顔を私に見せる。

こんなにも、怖い彼女は見たことが無い。

こんなにも、彼女を抱きしめたいと願ったことは無い。

「わたしは、ここで死ぬから」

どうして？ どうして急にそんなことを言うの？ 今までずっと一緒だったよ。

「一緒にいすぎたから。あなたはわたしに依存しすぎている。わたしはあなたに依存しすぎている。これ以上一緒にいたら、わたしはあなたの成長を止めてしまうの」

私と、わたしの目が、はじめて、本当に今までではじめて、

合った。

そうして、はじめて、わたしが私に触れた。

私の頬を、彼女がいとおしそうに撫でた。

彼女が泣いているよ。

でも、私は泣いていないのに、どうして彼女が泣くの？

だって、そうだ。

何かに気がついたけど、頭が痛くなって思考が止まった。

「思い出さなくていいの。このままでいいの。あなたは気にしなくていいの」

優しい声が、私の頬を撫でる。

私は、そのままふわふわした頭で彼女を見つめた。  
でも、思い出さなきゃいけない気がしたんだ。

「何も、思い出さなくていいのよ。そのほうが、あなたにはずっと  
楽だから。」

あなたはね、酷い子だから、楽な道だけ選んで進んでいけばいいの。  
今だけよ。前までだけよ。

でもね、でもね」

いつまでも冷静で私を侮蔑していた愛しい彼女が泣いて、言葉を詰  
まらせた。

何がそんなに哀しいの？

ねえ、私にもその哀しみを分けてよ。

ねえ、私の、愛しい……

愛しい。」

なんで愛しいんだろう。だってさ、目の前にいる女の子は、私と同  
じ顔をしているんだよ。

まるで、私を愛しいって言っているみたい。

「……思い出してはいけない。わたしがぐずぐずしているからね。

お別れよ。」

よく聞いてね、よく、聞かないでね」

彼女は必死に言う。

私の頬におく彼女の手が震えて、彼女の手は、私の手をとる。

私は、それを何も考えないで見ていた。

それは、かいがらとよばれる、優しい手のつなぎ方。

かいがら。貝殻は、私たちとよく似ている。

私は、急に頭が冴えたようで、顔を上げた。

彼女の顔が、とても悲しそうに歪んだ。



「ねえ、わたしのことは忘れてね。  
そうして、あなたは生きて。

わたしは死ぬから、  
わたしが持っている人の感情をあなたに返すから、  
あなたはこれから、たくさんのお優しい人たちに囲まれて、  
悩んで、笑って、苦しんで、それでも楽しんで、

生きてね」

さようなら

言葉もなく、彼女は言った。

私は、とつさに彼女の手には爪を立てた。

嫌だよ。嫌だよ。

忘れる？ 死ぬ？ 一人、生きる？

違うよ、嫌だよ、そんなの望んでいないよ。

だってさ、だって、思い出したよ。

あなたは、

「あなたは……っ！

もう一人の、私だから！」

彼女は、私の手に爪を立てた。

そうだ。

私は、保育園の時に一度死んでしまったんだ。

家族に、ひどい、（どうしてこの家にいるの？）きたない言葉を、  
（死んでよ）言われて、私は死んだ。

その時に、私は彼女を見つけた。  
作っただ。

私とひどくよく似ていて、でも私よりもずっと有能で、優しく、  
頭も良くて、なんでも言えて、誰とでもうまくいく子。

私はその子に、私の感情を渡した。

もうこれ以上、私の感情に傷をつけてはいけなかったから。

その子なら、うまく守ってくれるから。

その子は、鏡で自分を見ないと会えなかった。

水溜りにふいに移るあの子。

窓にうつすらと微笑むあの子。

でも、本当は、それは自分だったんだ。

愛しい彼女は、私のもう一つの人格。

思い出して、涙を流す。

「さようなら、さようなら……っ」

彼女は、もう一人の私は何度も私にお別れを言う。

でも、なんだか謝られているような気がした。

だから、私も泣いた。

お互いの手を爪で傷つけて、これで最後だからと、お互いで。

「うん、さようなら」

私は、驚くぐらいに穏やかな声で、別れを告げた。

愛しい、私に良く似たもう一人の私に、別れを告げた。

そうして、私は、目を開けた。  
いつの間にか、眠っていた。  
立ち上がると、体がふわふわした。

まるで、人一人分の重さが取れたような。

私ははっとして、鏡を見た。

目を腫らした自分がいる。

「ね……ねえ」

声をかけた。

そうしたら、同時に鏡の私は私と同じ口をした。

心臓が、ぎゅっと押しつぶされて、私は、

たった一人で、

泣いた。

（愛しいあなたに、どうか、幸せを。）

（後書き）

文章とか、関係とか、よく分からないと思うでしょうが、私でもこのお話は本当に解読できていない、みたいなの……自分で作ったお話だけど……とにかく、彼女への愛が感じられればいいかな、と。そして、文章に意味はないのです。ただ、思っていてほしい。ただ、映像だけで、見ていてほしい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2225j/>

---

あのこと、わたし。

2010年10月28日07時12分発行